

国立公文書館内閣文庫蔵『百韻連歌集』の翻刻と解説（二）

松本 麻子

【解説】

- 国立公文書館内閣文庫蔵『百韻連歌集』は、次のような三八の連歌百韻を集め書写した書である。
- ① 文禄二年五月「あめのひの」何木百韻
 - ② 文禄二年五月六日「あつまやの」何路百韻
 - ③ 文禄二年五月廿七日「たかにはも」白何百韻
 - ④ 文禄二年正月十日「にはくさの」何人百韻
 - ⑤ 文禄二年正月十四日「けさのまに」山何百韻
 - ⑥ 文禄二年正月十八日「わかになつみし」何人百韻
 - ⑦ 文禄二年二月十二日「うめさきて」何人百韻
 - ⑧ 文禄二年二月十八日「はなさけと」何人百韻
 - ⑨ 文禄二年五月十六日「はやまさへ」何路百韻
 - ⑩ 文禄二年五月廿日「わかたけを」何人百韻
 - ⑪ 天文十八年三月廿四日於大覚寺殿何人四吟
 - ⑫ 天文十三年卯月六日追善両吟
 - ⑬ 弘治五年八月十一日「たゝならせ」何船四吟
 - ⑭ 元龜四年六月六日「はなのときも」何人兩吟
 - ⑮ 永禄七年正月廿二日「きえしその」懷旧兩吟
 - ⑯ 永禄五年八月十一日「つきなから」何人兩吟
 - ⑰ 弘治二年三月廿四日「ゆくみつや」何路兩吟
 - ⑱ 永禄五年十二月九日於飯盛城何船兩吟
 - ⑲ 永禄五年三月七日何船独吟
 - ⑳ 「みつくさを」何人三吟（安宅冬康・三好長慶・宗養）
 - ㉑ 「はなのいろも」何人独吟（宗牧）
 - ㉒ 永禄六年仲冬十八日「はつゆきの」紹巴独吟懷旧
 - ㉓ 天文廿一年七月廿六日「つきやけさ」山何百韻

- ◎24 永禄八年八月廿二日「たもとまで」何木百韻
 ◎25 天正三年三月八日「なはしろの」何船百韻
 ◎26 天正三年二月廿日「いけみつの」何人百韻
 ◎27 天正三年二月二日「あをやきの」山何百韻
 ◎28 天正二年五月八日「かせふけは」山何百韻
 ◎29 天正二年六月十日「すすしさを」初何百韻
 ◎30 天正二年六月十一日「みやこにも」何人百韻
 ◎31 天正三年正月七日「こころあてに」何木百韻
 ◎32 天正四年八月十九日「わけゆかは」百韻
 ◎33 永禄九年閏八月十八日「あさきりに」何路百韻
 ◎34 元龜三年九月廿八日「とめゆけは」何人百韻
 ◎35 元龜三年三月十八日「むさしのも」何船百韻
 ◎36 元龜二年八月六日「あさかせの」山何百韻
 ◎37 元龜三年七月十三日「あさかせの」何人百韻
 ◎38 慈音院前天台座主二品堯然親王御追善独吟
- 題簽には「寄合連歌」とあり、『百韻連歌集』は整理書名であろう。これらの百韻は、宗養・紹巴時代の連歌を中心としたもので、特に紹巴の参加した百韻は未翻刻のものが多い。紹巴の参加していない宗養の百韻⑪・⑫・⑬・⑭・⑮・⑯・⑰・⑱・⑲・⑳・㉑については、斎藤義光『宗養連歌百韻撰』（一九八九年、私家版）に翻刻が掲載されている。大部な資料であるため、今回は（二）とし、◎印で示した⑳・㉑の紹巴が参加した百韻を翻刻しここに掲載する。○印で示した①～⑩、⑬～⑮、⑰の百韻は「国立公文書館内閣文庫蔵『百韻連歌集』の翻刻と解説（一）」（『医療創生大学研究紀要 人文学・社会科学・情報学篇』第五号、二〇二〇年二月）に掲載した。また、⑳～㉑については別稿とする。
- なお、翻刻に際し、仮名遣いと踊り字は底本のママに、異体字・旧字は新字に改めた。虫損や汚れ等で判読不明の箇所は□で示した。また、難読語にはルビを付し、（ ）の中に読み方を入れた。句挙の句数が一致しない場合も、底本のままとした。

【書誌】

国立公文書館内閣文庫蔵本。所蔵者整理書名『百韻連歌集』。題簽に「寄合連歌」とある。函番、二〇二一一二五二。写本一冊。内題ナシ。「浅草文庫」の朱印。表紙は、藍色無地。本文楮紙。寸法、縦一二・八糎×横二〇・〇糎。本文、墨付一六四丁、一面一三行書、一句一行。遊紙、前後ともにナシ。奥書ナシ。

【翻刻】

② 永禄六年仲冬十八日 九拜 紹巴 懐旧（独吟）

紹巴

25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

初雪※のきえまたぬ人の行多哉
 名残とふ野は冬草のかけ
 庭に猶松虫ならぬこゑそへて
 峰越つゝもをしか鳴山
 白雲にこもりし月や更ぬらん
 よ寒おほゆる風の絶々
 遠近にうち出けりなから衣
 春にかりはの袖そいさめる
 休らひて馬草かふ野の朝霞
 河舟（はるふね）いつこ青柳のもと
 杳（はらうか）なる流の末に里見えて
 残るも空はうすき日の影
 もよほすやこぬ秋ながら風涼し
 みとりにしける竹の下道
 千町田やいつしか植も渡すらん
 方々になる袖の帰るさ
 長夜をそひねに人はとけやらて
 うらみはいとゝ有明のころ
 住吉や霧にうかへる淡路嶋
 木の間あらはに松風のふく
 咲つゝく花もかたえの散初て
 やとりしらるゝ春の鳥のね
 霞む日に里問かねて草枕
 かきり猶はたあらぬのゝ暮
 送りきてむなしきからに泪落

55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26

乗るもいかにとみゆる小車
 学たゝ橋を出しのちかひにて
 あまたのとしをふる寺の窓
 暁を待ともしひや消さらん
 よその別のたよりのむる
 命猶さかしら人にくらへきて
 ゆるす時にしあへる左（さ）へ（へ）きて
 明石かた隔る波の浦かなし
 ほとゝきすかと舟に聞こゑ
 夢覚る枕の山は月落て
 板間やしけき衣手の露
 秋風のふく度々の村時雨
 ちるあとみする陰の紅葉は
 梅はまつつほみに春をあらはして
 むすほゝれたる鶯のこゑ
 雪は今朝とけて雫の絶ぬ日に
 入方ふかき山あひの道
 引袖のつゝきて舟は浪のうへ
 根もうき草にあやめわかれぬ
 すかのはの方よるはたゝ筵にて
 うちわひつゝも独ねの月
 かはすよは露の枕のあさはかに
 ことのほのすゑも秋になす中
 みよやいま春の御前の花盛
 かすむと絶の沖の白波
 かり帰る羽風は天津空かけて
 をやみしも又雪のうちゝる
 山里は時雨の雨の音さひし
 むかしの夢の跡したひつゝ
 かしこきにまかする世こそ安からめ

85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67 66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56

あつかりまうす末そかはらぬ
たのめとの人の情のおりくに
かきり今はもなくさめてこし
さりとも夕の雲に詠して
まつらん物と月やしりけん
故郷のね覚にはらふ旅の露
いつくもさそな袖の秋風
むさし野やお花か末の村々に
霧間なからの山のはもなし
梶を絶つなきし舟の閑にて
明はなれてものちそ夢みる
衣々の跡をたにとのかたしきに
ふれし名残もあかぬ袖の香
おらせしのあたりぬるゝ花の露
さしこもりたるさくら戸の山
霞むよも月吹分る朝あらし
海に一すち水しるきすゑ
ふし河や五月雨の中も氷るらん
重るまゝに寒きくもり日
足引の岩屋の陰の道とめて
きかしとするはうき世ならずや
いさむるもあはれみふかきおや心
出ていぬれは絶入にけり
物の化や恨にことをかはすらん
常にそはある人のあやしき
よむ歌もたゝしき道はかたかれや
すゑにうつろひはつる其かみ
山は猶もとつは稀にならかしは
跡よりはるゝみそれすゝしも
一通あらしの雲を先たてゝ

86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100
こゑ(はるか)にも雁渡る空
大はらやふしみの月の明方に
秋行舟の袖ほのか也
刈はこふ芦のしのやは山かくれ
門の前田の遠きかたはら
道やたゝ細もすゑのつゝくらん
つなくは駒の草にはみぬる
古跡の砌はかこふかたはかり
霞を野への夕明ほの
色も今春日にむかふ山高み
柳はうへも花のかつらき
うす雪やたゝしのゝめの程ならん
こほれもあへす露しろくみゆ
草村のすゑはかれ行秋更て
なれしやとりは月すめるくれ

※発句から第17句まで、句頭一句ごとに「はなにみしよを
はやかはのもみちかな」と記されている。

②4 永禄八年八月廿二日筑後大鳥井正佐房信芸興行 何木

1 袂まて入乱れたる花野かな
2 うす霧寒みなひく村雨
3 飛雁のはらふ羽風の露落て
4 まくらのうへの月のさやけさ
5 越残す山路を遠み暮る日に
6 まかふやとりや峰の白雲
7 みるくも梢つゝきの雪晴て
8 時雨や竹のそよきなるらし

紹巴 信芸 清誉 昌叱 長澄 玄哉 心前 鑑勝

38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9

さし捨る小舟はさとの河つらに
誰かたはらのたく火ほのめく
行螢末もわかれす昏初て
秋風立ぬ半天の雲
いつのまにまたれし月の出ぬらん
はしるにふかすいなつまの影
あたし世を浅ちか露に詠して
霜にうつろふ野への一かた
幽なる道はふもとの夕附日
爪木の袖の遠きかへるさ
舟人の花の岸ねを行やらて
柳のおくにこもる川上
月白き影や霞のひまならん
明方までもあらし吹音
片しきの枕に近きかねなりて
いくかもおなし山を分つゝ
立鳥も稀なる雪のかり衣
御幸といふはなほさりにやは
時めくはあまたの中の独にて
忘れぬうつゝよるくの夢
今もそのあらましかはと頼む世に
心のすゑやことのはのたね
別てもらにかはらし都人
なせるつみやはふかきさすらへ
かり初の栖の跡の道たえて
きる木かくれのおくの杣かた
しからきの山は霧ふる明暮に
時雨をさそふ月の秋風
袖も猶音に啼鹿にめは覚て
分て行々小萩うち散

広 康 常 宗 早
次 敬 数 仍 繼
勝 前 哉 誉 叱 澄 芸 巴
敬 数 仍 繼 前 哉 誉 叱 澄 芸 巴 勝 前 哉 誉 叱 澄 芸 巴 勝 前 哉 誉 叱 澄 芸 巴

68 67 66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39

玉河やくたくる波の野を遠み
ひろふかひなき浜の入しほ
芦のやにかゝれる舟のかけ暮て
けふりにしるきさとの一村
竹のははよのまの霜やとけぬらん
はふき出つゝ行鳥のこゑ
引ことに催す舞の袖はへて
ともになふるけふのこゝろみ
たかふなと道しるへする媒に
しのひいりても又やわかれん
花の後月は有明のよし野山
霞にさひし楨たてるかけ
春の雨ふる屋のはしら朽残り
軒のすもりの鳥のあはれさ
さゝかにのいと引結ふこゝかしこ
ひき合たる竹の下草
野分せし跡より露は閑にて
霧にこもれる山きはの道
音も猶たかきぬたにかいそくらん
わかまつ人はあらぬあきのよ
しられしと更すは月をかことにて
こほれて匂ふ小車の袖
折かさす花を都の行かひに
杉村かすむあふさかの山
春もたゝ限今はのほとゝきす
名残をしはしたふ鶯
みし夢もまた覚やらぬ朝いして
なくさめんとのおもかけやこれ
鑑こそ心を残すわかれなれ
のほりし空は遠きそのかみ

巴 前 芸 仍 勝 数 次 巴 誉 哉 巴 叱 敬 芸 仍 澄 前 巴 叱 誉 仍 数 哉 前 巴 誉 澄 玄 叱 巴

98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69

布引の滝はことなる岩つたひ
 水こそひ々け五月雨の跡
 道ほそく人け絶たる寺の門
 松吹風や法をつたへし
 月たにもとらぬ 葎(つげ)の衣にて
 露消かへり長夜もうし
 音にたては思ひいつれかきりくす
 ふたりならぬもたへし蓬生
 よすかなき後もいもせと頼きて
 おなしやみちはさもあらはあれ
 星にしもまかする舟はいく夕
 北に入江の波の遠山
 天津雁立帰行こゑきえて
 あかつきふかくかすむよの夢
 年もはた此ねぬるまに越ぬらし
 やとをもよそに方たかへつ々
 遙にも出る門出は日えりして
 はる々なかめのかきり待空
 初雪に峰は明ての朝くもり
 風のと絶は冬としもなし
 さ々ふきにこもるも月にさそはれて
 行方いつこ日くらしのこゑ
 色々の木の小道やわかるらん
 ひとつ所につとふ市人
 住吉やうらはに近き舟みえて
 夕日に晴るむこの海つら
 山のはや雲より上に成けらし
 俄(わか)こふ々きよきりて行
 明(あけ)更の花も木くらき雨落て
 時の間たにもおしき春のよ

澄叱哉前巴勝哉誉前数澄巴次哉仍誉巴叱芸前哉巴叱芸数澄成勝誉叱

15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

待程の月に端居やうつるらん
 雲の絶間のひかり涼しも
 暮ぬれは山のこなたの幽にて
 行つくしたる旅人の道
 つなき置舟は汀のかたはらに
 そよきしつけき竹のすゑく
 時雨つる名残と々めぬ日のさして
 箔(すだれ)をまけは明渡る空

霧にこもれる山はるか也
 昏ふかみほのめく月の秋風に
 柳かくれの袖のかへるさ
 雨に成春の河舟引とめて
 かすむ流のさとの遠近
 苗代の水さへひろき門田哉

② 昌叱清書の懐紙には正月廿一日とあり
 昌叱清書の懐紙には正月廿一日とあり
 何の船

10099 逢程は心のとけきともなひに
 あかすめくらす酒のさかつき
 早継
 一
 玄

紹巴 十四 心前 十
 信芸 九 鑑勝 六
 清誉 十 広次 五
 昌叱 十一 康敬 三
 長澄 十一 常数 六
 玄哉 十一 宗仍 六

仙正文正兼了永英賢昌頼紹
 家巴隆重継閑允閑玄種怙家叱隆巴

45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16

又もひとりの閨の戸の露
長夜も残おほかるきぬくに
恨はつきぬことのはのすゑすゑ
音信はさすかにかゝる桑すゑ門かど
花さくころのおく山の春
鳴行は弥生の後の時鳥
明はなるれはかすむともなし
散まよふ雪を嵐のさそひきて
冬のゝすゝきほのかなるかけ
絶々の沢水さむき夕附日
雫も霧の晴やらぬ空
色々の山を笹の住居にて
ともなひつゝもなるゝ鹿のね
しき侘て月にいくよのかり枕
払つくさぬ衣手の露
逢みても残る恨をいかゝせん
そむきくに立別けり
隠家もおなしいもせはうき世にて
とふをそいとふをのゝ山陰
さひしさは雨を催す松の風
暮になりつゝ鳩の啼こゑ
住人もみえぬはかりの跡古て
みどりの洞をうつしをく庭
莓つばきふかき岩より岩に落滝つ
やとりさためぬ月の山道
衣うつをとやふもとの里ならん
霧に小倉の野への行末
吹としも覚ぬ程の朝風に
あつさしらるゝ夏の日の影
夕立のふるより露の色消て

家隆閑叱玄種巴怙繼閑隆巴叱文允種玄家怙隆叱繼巴允文玄種怙閑叱

75 74 73 72 71 70 69 68 67 66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46

たゝよふ跡も波のうき草
あはとのみ花をいくせになかすらん
返しもて行田つらはる香かけし
爰かしこ春の駒かふ袖昏て
野は下もえのまたはつかなり
年は越ぬ去年の寒さや残るらん
雪はそのまゝ高き山のは
霧渡る椎の梢に風みえて
波冷しき宇治の河上
かねや猶あかつき月にひゝくらん
置こそまされ秋のよの霜
うら枯の草の戸さしは哀にて
かきほのかたへさけるなてしこ
日の色もかたふく比やよはからし
やすらひつゝもむかふ山道
旅の袖雲の衣を重ねきて
くるれは春の花の下ふし
けふ毎に狩あかぬこそ桜なれ
心のとかにくめるさかつき
ましはるも口とき歌はうらやまし
すゑに残るも一筆のあと
ま砂ちに下ぬし鳥の鳴立て
汐みちくらし浜川の波
荻のはや片寄まゝの秋の風
軒にもりいる月のさやけさ
いなつまの影せし枕更々て
露にもまかふむら雨のをと
楨たてる山は夏なき木隠に
氷室のあたりくたけ出けり
あみ置し筏や波に朽ぬらん

種巴文怙叱允家繼巴隆玄文種巴怙家允叱文玄繼怙巴閑隆允種文叱巴

10099 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76

賢 紹
家 巴
 叱 隆
 八 十 三
 文 兼 了
 八 允 閑 玄
 八 七 八

橋りすゑの道はつゝかす
つくるにもあれかち成小田の原
野をかたかけて草ふかき里
青柳にこもりしはたか軒ならん
鳴てつはめの巢にかよふみゆ
明昏もわかぬ霞のあまそゝき
かゝみの影も物思ふ人
恋はたゝおやのいさめを思ひかね
たのめ置しもいとけなき程
無跡にふかき恵を送りきて
ほそきも道はふるつかの前
灯はかゝけもやらぬひかりにて
秋のほたるの草むらの中
月になる風の下露打みたれ
霧間によする離磯の波
こきまよふ袂とやぬるゝ舟の上
あたし契に何かゝるらん
つれなきも花ゆへにたゝ尋きて
藤のかほりもあさき蓬生
あさ露や霞の底に結ふらん
ねたるまゝなるてふのしつけさ
日のうつる方に野風の吹たえて
夕の遠にかへる笛のね
問人をしたひ捨たるやとさひて
たゝかり初もなさけある友

繼 叱 巴 種 怙 允 玄 隆 閑 家 叱 文 巴 繼 隆 叱 家 允 玄 巴 種 怙 叱 隆 閑

23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

池水の底にも花のさかり哉
波のうへなる春の山の端
消残る雪もうたかたの流にて
みとり添行竹のすゑく
涼しさをならせる風のかすの
袖にうつれる月ほのかなり
露やたゝ時雨もあへす過つらん
かたへ色付木かくれの道
さをしかのかよふ田つらは山かけて
うす霧なひく遠の一むら
河風の吹送りたる朝朗
絶々にしも舟くたす袖
をくれつゝ帰るきこりの跡先に
鐘より後も昏やらぬさと
山あひの雲はみるく晴初て
近き尾上の松の木高さ
散絶て残らぬ風のした紅葉
砌にすめる半天の月
遣水の末まで霧の立消て
且々おつる竹のはの露
秋のくるけしきもしるき夕間暮
いっよりさひし隠家の窓
めなれつる文もかすめはたとくし

②6 天正三年二月廿日於嵯峨大覚寺殿何人

英 怙 正 繼
永 種 九 仙 重 一 七

叱の自筆にて一更了

紹 昌 心 友 慶 宗 賢 兼 安 重
巴 叱 前 方 典 及 海 閑 親 秋 巴 種 親 閑 海 及 典 方 前 叱 秋 巴 種

53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24

かきりまたるゝ春雨の空
あたりさへ苗代かきね水越て
近よりつゝも蛙なくこゑ
ふかきよやね覚のまゝにあかすらん
たゝ独あるとこの月影
とはすしも成ぬる人の秋の風
うら枯てたに草しけき道
置霜もかたを分たる野を広み
日はさしなからくらき山陰
河舟やつなき捨つゝ帰るらん
たへて住ともみえぬ芦ふき
朝なくはらはてちりの爰かしこ
むかふ硯もおこたりてけり
しはしたに哀ひまなき宮仕
身をなさはやもいつの春秋
せはしきは草木をうへん庭ならて
いらかかさなるこの殿つくり
おこる世や背くいさめに乱るらん
よるひるあかぬ酒のさかつき
そはたつる程しもあらず枕して
夢の中なる山ほとゝきす
いつしかに夏は過ての月の秋
あつさ残らぬ夕風そふく
露かゝるもすそや波の浜伝
いそくも旅のすゑ 杳ほろなり
あふ坂の山をも花に出やらて
かるや名残もうくひすのやと
明るよをねたるこてふのしらぬの
霞のうちの風はしつけし
住江やたかうつしをく波ならん

叱 閑 巴 叱 秋 海 前 巴 閑 親 及 前 叱 秋 巴 方 典 及 親 叱 前 巴 秋 閑 及 海 方 典 叱 前

83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67 66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54

茂る若はに藤は残れり
打なひく竹の下道過やらて
さとの往来そ雪に絶たる
更ぬとや人はねにけん秋の月
うち重ねんのきぬたともきけ
冷しく成ぬる中や慕らん
稀の便にかはす玉つさ
哀猶立隔てのすまの波
けふりにまよふあまのもしほ火
雨雲は風よりすゑの一方に
峰こえ残す夕日さやけし
とめて行さとのしるへや鐘のこゑ
道は落はのおくも木ふかき
世の外とおもふ心もさたまらて
身をうち河の波あらき音
舟長のさし渡す程も早きせに
いかて小苗をとりをくるらん
五月雨ははるゝともなく日をふりて
雲のうちには月いつる山
乱たるつらもひとつの雁のこゑ
あらし絶ても秋さむき比
樞こしら 猶明はつるまで引とちて
きのふの花をおも影の夢
春の日もおしめるまりのあかなくに
霞にまじる袖のいろく
誰ために雲の衣をおほふらん
やゝ明 更あきらのあまのかく山
思ひたつ心や神にいそかまし
うきとものつれなさも猶いやましに

前 親 方 巴 閑 前 巴 叱 秋 及 前 方 海 典 叱 秋 親 巴 閑 前 及 叱 巴 海 典 巴 前 秋 方 及

2 1 ⑳ 天正三年二月二日美濃国住西松安親入道興行 山何

青柳のせきやる水は音もなし 紹巴 安親

雨晴わたる春の川崖

世を捨なんもたかふ度々
みるまゝに子をかなしみの親としれ
すになれつゝも鶴のもろこゑ
松陰や霜よの月のもらさらん
たのみ今はの閨のうつみ火
かそへつゝ待にも春や近からし
夏にほとゝきすきてきななぬ
いつはりしさはりもいつかなくさめん
あふに心のとくる下帯
とひぬとも背くるかこといかなれや
すちをあまたになせる法師
古はつる野寺も道を改めて
かきなかしつゝすますいさら井
朽にたる水草かくれの春の花
柳か枝そ波におれふす
吹音もあらしは去年のまゝにして
さえかへりたる遠山の雲

10099 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84

紹巴 十五 宗及 十一
秋 十一句 賢海 七
昌叱 十三 兼閑 七
心前 十二 安親 六
友方 九 重種 一
慶典 八

及 叱 秋 巴 典 及 巴 方 叱 典 及 典 巴 秋 叱 及

32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3

霞むのゝ夕舟待駒とめて
月また遅き山もとの道に
涼しさを求る袖の秋風に
置そふ草の露やこほるゝ
薄霧の笛のかたへ虫鳴て
外面の入日かすかなる影
流出る竹の下水すゑ遠み
岩ほつたひそふむ跡もなき
行方の山より山やふかゝらん
ま柴の袖は昏はてにけり
風なからかきくもりつゝふる雪に
寒さに窓のひまそ覚ゆる
暁の枕はさらにもあはて
おもひ絶てのさ筵の月
今は猶心の秋をうらみ侘
世を捨し身も衣手の露
花さけは思ひやらるゝ昔にて
春ともわかぬ蓬生のかけ
稀に汲古井の氷とけ残り
またきえ返す小山田の原
一むらの絶々かすむ道淋し
すめる隣もへたてぬる庵
侘ぬれはいとゝうき世をかへりみて
うらみんふしもをしこめてけり
かく文の散て二人の名やたゝん
あそひかたきもいはけなきほと
鶏のはふけははふくこゑそへて
をくれしとよにいそく関の戸
影消る月にはたれかいをもねん
野分の音を残す山風

昌前 心 英 友 了 文 兼 紹 家 春
叱 前 枯 方 玄 閑 閑 哲 阿 親 家 玄

及 叱 秋 巴 典 及 巴 方 叱 典 及 典 巴 秋 叱 及

62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33

ふりはるゝ秋の時雨の度々に
落はの色も絶ぬ水上
さしうつる松の木の間の夕附日
とまり鴉のさはかしく啼
みるまゝに雪を催す空の雲
つるゝ木こりのかへるさの山
住つかぬ岩屋の道はわきかねて
一夏をしもこもる古寺
大方にまなはゝいかゝとはかりに
けしきえならぬ筆のいきほひ
取度に扇はさらに置かたみ
なき佛のあはれ身にしむ
秋のよになとて短き夢ならん
鹿のねつらし明ぬ手枕
衣々を月にしたふもはかなしや
忍ふ行ゑをいかにとかせん
散花の後もいてしと入峰に
霞のかこふめぐりしつけし
さす舟も春の御前の嶋隠
夕風立ぬ住よしの波
方々に友呼かはし鳴千鳥
霜くらきよの別ちのすゑ
うつり香のはつかに残るわか袂
さめ終ぬこそうき思ひなれ
しゐられしなさけの跡は物やみに
けふは都を出やらぬくれ
波の音あらましくなる難波舟
汐みちくらし芦のはつたひ
さやかにも苦やの軒は月更て
こゑもかすかにうつあさ衣

玄 哲 巴 前 閑 怙 家 親 叱 文 方 巴 怙 叱 巴 玄 叱 閑 文 方 前 親 玄 巴 哲 家 方 前 巴 文

92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67 66 65 64 63

霧こむる片岳越や遠からん
たえすしらのゝ木の下の道
夏の日はほのかにもりの蝉鳴て
いつみをさむみ立ならず昏
いつくよりたくみことなる殿作
車なからの門の行かひ
ゆかりさへおとろへぬれは思ひけち
こととふひとのあらぬさすらへ
誰もたゝいちはやきよを侘ぬらし
うきを心にたへし明昏
出ていなは浅きになさむ契にて
やとるこてふの花そのゝ跡
草も木も茂り合たる春深み
露にかすめる月の山きは
幽なる野風の末の吹たえて
舟は沢辺の水のまにくに
里人や馬草刈つゝ帰るらん
くろにつゝくる道あらは也
そこはかとなきも猶問折にふれ
戸さしを近み啼きりくす
秋はたゝわきて夕の物思ひ
月さへぬるゝわか袖のうへ
爪ことも端み更行しらへにて
おもひかはすにあかぬともなひ
へたゝらん程はたいかに遠つ国
仏はむねのうちにこそあれ
其まゝに身の姿をは任てよ
行ゑを頼む人のうしろみ
さきたつに漕はなれぬも沖つ舟
おなし湊の芦火たく影

家 叱 前 親 巴 玄 怙 方 閑 哲 前 巴 叱 文 哲 怙 家 閑 巴 叱 文 前 親 玄 哲 方 叱 巴 前 叱

10099 98 97 96 95 94 93

打みたれ暮る方より飛螢
休らふも猶涼しさそそふ
雨はまた淋も捨ぬ笠やとり
かりはの袖は道のへのすゑ
帰らんもいかてかた野の花の陰
枕にむすふ春の若草
啼方のとこなつかしき夕ひはり
いくへの霞分てこし山

文方叱前親怙玄巴

紹巴 十四 了玄 九
安親 八 文閑 八
昌叱 十三 兼閑 七
心前 十二 能哲 六
英怙 九 家親 六
友方 八 音阿 一

㊥ 天正二年五月八日水野監物丞守隆興行山何

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
風吹は袖につゝめる螢哉
夏草分る夕昏の道
枯残る花の木陰の香をとめて
霞をつたふ山水のすゑ
梯の岩間の氷とけゝらし
霜はかすかにうつる日の色
夜を寒み月は軒はに明離
あらしの音も絶々の空
雲かゝる松は木高き梢にて
雨晴わたる野へのはるけさ
草枕夕の露にむすひ侘

紹巴 守隆 昌叱 心前 玄哉 勝長 如圭 英怙 榮紀 了玄 兼閑

41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12

冷しくなる道のかたはら
ほのかにも虫の鳴音の弱きて
ねられぬ秋のあかつきの夢
恨つゝ独や月にむかふらん
さはりを文につたへやる中
かへるへき比も過行旅はうし
ことしといふも昏はてにけり
又もこむ春にあはんを命にて
つみこそなるれをのゝ若草
たちつゝく袖は雪間も白妙に
霞そめつゝ明る遠山
一つらの翅もしるき雁鳴て
田面のすゑも色に成らし
露はたゝ所々の霜ふかみ
夕風さそふ月の板ふき
軒近き霧の下葉の散添て
とはれんとおもふ道は絶けり
よひの間はしけき人めや忍ふらん
したひ出たるきぬくの袖
かはるなとおほつかなさを押返し
雲を心の花の山の端
みる方はそことはかりの春霞
こゑせし鳥のぬす立て行
朝またき分つゝいそく野への末
宮古に近き氷室なるらし
陰は猶茂り木ふかき松か崎
むかふも哀なき人の跡
さ籥のかたへさひしきよはの月
契置たるあふきはかなや
いつしかに 樞もとつる秋の風

右承運 快隆巴 前叱哉 怙圭長 紀玄閑 前運巴 長叱隆 哉怙圭 隆巴 快承運

71 70 69 68 67 66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42

かきほの荒間分ぬ蓬生
槿の花の匂ひも冬かれて
いくへはかりか霜まよふらん
真砂ちに下る雁の打羽吹
汐の干潟の跡や白波
涼しさは立ならさぬも浦の松
越行まゝの山のした道
誰か袖に雲の衣をかさぬらん
うき身の消をおもふあやなさ
おなし世にあれは見聞もなくさみぬ
おほけなきにはかこたんもいさ
数ならぬ程こそは猶哀なれ
賤かそのふにうふる山なし
春雨のふり昏したる里淋し
ふかき筈にてふはねぬめり
草むらに払はぬ道やまかすらん
せかれて水のわかつ方々
わかおもひせはしき袖に忍かね
身の程をしる心かなしも
たのみしも今はのきはに驚て
酔のねふりのしつかなる暮
端近き枕にうつる秋の月
時雨し音や玉たれの露
檜のはの色にや風もそよくらん
鹿鳴峰は遠き片岳
明石瀉せとの波こす早舟に
住かへなんも憂すまのうら
侘る夜はかりのやとりもなかりけり
いく度かさて行かへる昏
うかれ出るわか魂をとゝめてよ

前隆長叱哉巴紀前玄巴叱隆閑哉前長紀叱運怙巴承叱圭怙巴隆紀長哉

10099 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72

夢の中にも人やいとへる
寄臥もつらき隔てのから衣
ことかはすまも夏のよの月
聞もたゝそれかあらぬか時鳥
しはし休らふ森の木隠
春草もふまゝくおしき花散て
たかみきりとか霞こむらん
永日もあかぬ円居のともなひに
たかきいやしきよむ和やまとうた歌
なそへなき思ひの程をあらはして
うらみも物のけしきめきけり
我ならて待よの門はまきれめや
霧間ほのかに月出ると
むらくの露に木葉や枯ぬらん
袖やゝさむき山あひの道
行々も秋のあらしの吹添て
方もさためす河千とり鳴
昏ぬれは入江をめくる湊舟
たく火そさとのしるへなりけり
竹のはもかこひそへたる草ふきに
うへし前田も残る苗代
細道はつたひもそ行野をかけて
馬屋の内にはふこゑする
旅人のもとつやとりにかり枕
おもひくに起わかれけり
明ほのゝ鐘にも落し花のもと
桧原かおくやかすむ小泊瀬
河波も春をうかへて流きぬ
つもるもしるき雪の水

哉怙叱前長隆巴圭哉叱玄巴前運紀閑怙叱巴前長隆玄巴前圭運怙閑

18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
 秋の千鳥のこゑをかはしま
 みつ汐にいその山風吹添て
 あらき波間をこく舟のうへ
 帰りてもしはしはおもふ旅の道
 ぬき捨て置ころもへぬめり
 人香もや忘かたみと成なまし
 わかれん物かねやの戸の内
 ほのかにも鐘のひゝきの聞えきて
 やゝはたけふも暮渡りけり
 行々も雪や重る袖ならん
 さむさもよほす片岳の雲
 打むかふ夕日の影は幽にて
 ねくからもやなき（さむ）く鳥のね
 軒近き竹のはな（さむ）く秋風に
 うす霧残すこすのとの露
 半天に月も明行雨晴て
 松は木たかく茂る夏山
 涼しさをふくみてふかし谷の声

雅興行 初何 天正二年六月十日於近江石山世尊院景惠山岡対馬守景

紹巴 十三 如圭 六
 守隆 八 英枯 八
 昌叱 十二 榮紀 七
 心前 十一 了玄 六
 玄哉 八 兼閑 五
 勝長 八 右運 六
 快承 二

紹巴 景雅 景惠 英枯 景良 景種 長征 兼閑 景仍 近清 福松 仙雅 芭松 惠 雅 仙 芭 松 網

48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19
 有明の月や枕に更ぬらん
 露うちそゝく庭の草々
 故郷と花もうらむる色みえて
 出にし跡そ霞へたつる
 朝日影あくかる春の山の端に
 とりくにしもつれて行声
 打つゝくかりはの袖の野を広み
 しくれ過れば雪になる空
 松風に板間もり入月さえて
 心をすます秋のふる寺
 岩かねの雫のをとも霧中
 笥の竹や露に朽けん
 刈し田のあたりは草の生茂り
 山遠くなる鹿のかよひち
 憂事は世のならはしと思ふ身に
 あまりなるまて人のことのは
 限いつたのむいなせにかゝるらん
 はかなかりける玉の緒のすゑ
 行ひのこゑふたけによは更て
 消しもありしともし火の影
 跡先に帰るもしるき海士小舟
 高峰の雲そ風をみせたる
 越残すふもとの里の休らひに
 分んとすれは薄ちるかけ
 虫のねは所々の夕まくれ
 月や尋て人もくるらん
 水さひみて砌の池はかた斗
 さすとしもなく舟そうかへる
 吹上し山の木葉に風早み
 色香もおしき春の花園

良種 征閑 網 仍 清 芭 仙 雅 征 恵 芭 網 良 種 閑 芭 恵 征 雅 仙 芭 網 仍 清 芭 仙 雅 恵 種 良

78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67 66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49

樞(七ぼそ)をも絶ぬ霞にとちられて
音のとかなる雨のつれく
鳴すつる夢の行ゑの時鳥
起出るよの月そのこれる
かり初の契おもへは身にしみて
あたしひ心の秋はたのまし
枯ぬまはかこはせて住草の庵
つもるかうへにふれる白雪
早河も氷によとむちりあくた
春に成たる九重のうち
霞にやましはる袖はあかさらん
いつくよりかはにほふ梅かえ
うくひすのかきほにきぬる朝朗
栖は近き野へをかけゝり
おくふかみひろふ薪や運らん
一すちつゝく古はたの道
梯は岩のはさまに朽やらて
ちりていくかの秋のもみちは
時雨もやすかるのこゑを急らん
風のまにくまよふ雲霧
行方を定かねたる沖つ舟
旅はこゝろの心ならずよ
都とて身は安からぬ朝夕に
つかふる中のそねみをそおふ
あつしさのそへはかよはく成もうし
酔の枕のかたしきの袖
影は猶おほるけならぬよはの月
雲のいつこそかへる雁かね
天地もひとつに花の咲みちて
すなほにと世を神やまもらん

仙 巴 雅 種 巴 枯 閑 良 種 仍 綱 恵 征 巴 枯 種 巴 雅 良 綱 恵 巴 種 閑 枯 仙 征 仍 巴 枯

100 99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79
住吉の名は行末もむつましみ
ともに出るむこの浦舟
河波は海の中まで遙にて
跡は晴たる夕立の山
草刈の帰る袂の方々に
しほれていとゝもとあらの萩
かへ近く鳴りにけり蚕
野や露霜のふかく置らん
秋はたゝ寝覚かちなるさよ枕
雲もさはらぬ月の遠方
江の水に明るあらしの吹落て
渚は波の下にかくれぬ
行とくと通ひなれたるま砂地に
朝けの霜のけふる夕かけ
木の問よりうつろへる日はさやかにて
色に成たる夏草のすゑ
飛蛩乱て夜をや待ぬらん
雁もくるかと秋風のふく
霧晴る山に心のさき立て
露もいとはしむすひをく庵
花落的軒ははひまも荒ねたゝ
ともなひくらす春の一とき
紹 巴 十五
守 仙 六
景 石山明王院 雅 八
愛 綱 八
英 枯 十一
景 恵 九
古加兵衛 玄 良 六
山岡民部 景 仍 種 六
景 仍 種 十
長 征 八
兼 閑 七
近 清 五
福 松 一
征 綱 一
枯 仍 一
恵 巴 一
仙 種 一
巴 雅 一
良 綱 一
雅 種 一

天正二年六月十一日於江州石山 何人

28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
都にもみるらん月を夏の海
舟うかへつゝすゝむ夕波
青柳の陰よりさとは顕れて
かきほつゝきの苗代の道
絶々の霞や雨の晴ぬらん
朝たかかりの袖の行かひ
駒なへて帰るさいそく声す也
程ふる旅の友もかはらす
昏ことにむすふもおなし草枕
置こそ残せ露のかたはら
軒近き笹の菊の色々に
こてふのねたる秋の夕かけ
月に成野風の跡は閑にて
みちぬる汐に出る釣舟
江の雲に生たる松は見かくれ
時雨てとをる遠の山きは
つれぬるもこなたかなたに袖くれて
こゝろくのやとりもとむる
飛行も声かすかなる村鴉
神さひわたるおくの古宮
杉たてる陰も花よりしらむよに
隙見えつゝもかすむ池水
鳴出る流の蛙ほのかにて
昏ぬる空や雨になるらん
山人のかへりをくるゝ道のすゑ
しはしむかふも心みたれ碁
忍ひよる 樞とほその火影かすかにて
おもふ方にや夢もうかるゝ

景雅 景惠 紹巴 愛綱 英枯 景種 守仙 兼閑 長征 近清 玄良 景仍 重種 雅 惠 巴 綱 網 巴 恵 仍 良 清 征 閑 仙 種 怙 綱 巴 恵 雅 種 仍 玄 良 景 仍 重 種

58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29
逢ことの稀なる中のいかならん
後をしらねは言葉残さし
誓しもうつりやすきを習にて
旅にしあれはいそきぬる道
更科やわかるゝけさの月もおし
霧よりうへのみねのよこ雲
秋はたゝけしきはかりの一時雨
しける木葉やあへす散けん
みそ川の源は猶みきりにて
田面のはらにあさる白鷺
それかともみえし名残や筆の跡
扇や頼む行ゑならまし
わかるゝも立帰らんを心にて
さすらふる身の科とがは覚えす
酬こそ生れぬさきの物ならめ
いはけなきより知き道々
あひおもふすゑくまでの家風
住居は竹をたよりなるかけ
おらせしと花の片枝を垣こめて
行きもことに春の都路
さらてたにかすめる月に天津雲
ともなひかはし雁かへる声
吹と吹あらしの風も治りて
山より野への雪に成ぬる
岩波の越ていくせの滝つ河
ちいさき舟は行程もなし
いさゝかも法のちからはたのもしな
かけ置たりし御手のいと筋
古琴はむなしき親の記かたみ念にて
なにはのこともあらためぬのみ

雅 閑 仙 種 征 巴 恵 怙 雅 巴 征 種 清 綱 怙 恵 巴 征 種 仙 閑 雅

88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67 66 65 64 63 62 61 60 59

一方に打まかせたる世ならまし
 われそ人よりさきにいひてき
 しほりなき山路（ほろみ）杳（ほろみ）にとめ入て
 積たつおくの秋のさひしき
 夕霧の雫にぬれし月の色
 虫のね涼し玉銚の袖
 そことしもわかぬ野風の末遠み
 なひくも高き夏の草村
 引上る舟の綱もやたゆむらん
 氷かさなる河つらのさと
 むら竹の軒はにかゝる霜（あ）ふりて
 しとゝのこゑもさむき明（あ）更（あ）
 過かての風を枕の山かくれ
 月の光もにほふ萩はら
 そゝきしはあまたたひなる露にして
 いき出にける影は冷し
 物のけは折るしるしもあらた也
 終にうらみはよはりこそゆけ
 ちらぬ（□□）難面もまつ花のもと
 そはて過すはのとけくもなき
 吹しより霞を分る風の音
 かつきのあまも波にたゝよふ
 流芦のうかひ出たる嶋とみて
 国のはしめやわつかなりけん
 旅にけふおもむく心哀しれ
 又あひなんもいかに玉緒
 しはしとてひかふる袖に泪落
 みとり子をすて帰らんもいさ
 なくさめし身の絶々は身の齡
 昏てこそこめ春秋の空

巴 征 恵 雅 枯 綱 閑 巴 種 恵 仍 清 綱 仙 恵 閑 巴 枯 雅 巴 綱 良 清 仙 巴 綱 枯 恵 閑 仍

7 6 5 4 3 2 1 ③① 天正三年正月七日於昌叱 何木
 心あてにつまはや雪の初わかな
 梅にほふ野は遠らぬ道
 山風の明る霞を吹分て
 こすにいさよふ月のさやか
 時雨つる枕の上の露ふかみ
 冷しくなる旅の衣手
 行方も猶白波の沖つ舟

10099 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89
 有明の月に心もとめしたゝ
 うす霧残り重れる山
 分入も夕や露のしけからん
 かよひなれたるさをしかのこゑ
 はかなくもむすふ夢のゝいかなれや
 むらにはなれて淋し草の戸
 五月雨は田中のつゝみ越水に
 つれてきにけり鴨のすこほれ
 あらましき風に玉もの方よりて
 色香妙なる花のかほはせ
 朝朗露は霞にむすほゝれ
 わすれん物か春の山ふき

景雅 十一 兼閑 七 九
 景恵 十四 長征 七 七
 紹巴 十九 近清 六 七
 愛綱 八 玄良 五 六
 英枯 十 景仍 六 五
 景種 八 景仍 六 五

重種
 一 清 枯 仙 征 雅 巴 綱 恵 仙 種 良 枯

英 長 重 玄 心 昌 紹
 枯 閑 勝 哉 前 叱 巴

37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8

入日の遠の雲なひく空
声しつゝ山のはつかにとふ鴉
木高くみゆる松の一むら
霜まよふ野へは草はの枯終て
あらしの風のさえさゆる道
尋よる里のしるへや鐘ならん
月またくらす夕霧のうち
河音やしはし残せる秋の雨
雁鳴跡の波ははるけし
そことなくこき帰りぬる釣舟に
みたるゝ雲は風のまにく
みるくも日影は峰にかくろひて
やとりに袖やいそくやま道
散まては心とめしの花の下
春の枕に行ほとゝきす
明ぬ間は弥生の空となくさみて
かすむ名残の月の遠近
別つる跡をししたふかひもなし
しのふる中そと絶かちなる
叢はしほれなからの虫のこゑ
野分たちたる風のしつけさ
晴残る山のかたへの秋の雲
三谷の道はうすき日の影
ふむ跡も見えぬはかりに霜置て
衡なき立真砂地のすゑ
松原の陰にや舟のよりぬらん
けふりにしるしあまの住里
芦かきは所々にかこひ捨
荒はてにたる田面さひしも
はなちかふ方や馬草のしけからし

宗及 了通 澄慶 玄琢 正頼 正磐 紹巴 昌叱 前繼 在
宗及 了通 澄慶 玄琢 正頼 正磐 紹巴 昌叱 前繼 在

67 66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38

小たかのゝへをかりくらしつゝ
帰るさの袂は露に^{ぬれぬれ}沽々て
戸さしをかこち侘る秋のよ
さりともと頼むに更る月もおし
憂は使もおなしつれなさ
いひなしによるこそ人の心なれ
かるきつみをはゆるしてもかな
一房は折程もなき花ならん
葉かくれにしも残る藤かえ
流出つる春の山水雨すきて
すき返しぬる岩のはさま田
道やたゝ爰にかしこに替らし
立すかりたる市人の袖
たゝ独杖をたよりの翁さひ
いさめとなれはおもひ忘れし
かへりみる酔のみたれはかなしや
うつゝにあふをあたらの夢
ことのはをかはずまもなき衣々に
をし立入て閨の戸そうき
みる月に秋風寒き床の上
うすき衣もうち重ねはや
折かさす袖や山路の初紅葉
咲も添たる露の白菊
沢水の末一方は野をかけて
冬田の鳴の立て行跡
帰りては人も稀なる夕間暮
あたためくあたりとひも寄なん
小車の^{すだれ}箔の透またゝならて
こほれ出つゝふかき衣の香
いかてかは朝露なから花かたみ

早運 巴閑 及 長勝 前 在 繼 叱 長 巴 頼 慶 叱 前 勝 長 閑 及 巴 運 早

97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68

休らひかちのわか草のもと
とけぬるも汀の氷かたよりて
よや明やすき月の河波
舟にねし枕は秋に猶涼し
霧の雫も山ちかき方
こゑもたゝ色なる鳥の木伝て
かきほのつゝきいなほすさと
むらくに外面の霜やふりぬらん
一時雨してすくる夕風
雲間より残るはしるくうつる日に
重る軒の峰の古寺
小初せや散あとも猶花咲て
契こそすれとしくの春
哀にも巢にこほれつゝ鳴燕
空かきくらし雨そゝくさと
一通うへ残したる田つらにて
絶々なれや河水のすゑ
崩つゝ山かた崖(きし)の浮土に
木の下道や朝な夕霜
宮きのゝ露の名残も秋更て
つまとふ鹿の遠さかる声
長夜の枕やゝはた明離
入まてとしも詠する月
隔こし都の山のおも影に
むかしなからのしかのから崎
一本はいつより生る松ならん
神のいかきは朽はてにけり
しめ縄もたゝ道のへのちりにして
ぬき置(はるか)まゝのしつか蓑笠
柴人の杵(はるか)に帰る雪のくれ

慶 巴 怙 通 長 磐 哉 頼 怙 繼 閑 叱 巴 琢 早 通 在 閑 前 巴 頼 閑 通 早 運 怙 在 前 及 勝

10099 98
越るも跡は重れる山
吹もたゝ雲にあらしやたゆむらん
星の光のすめるあかつき
在 叱 及

紹 昌 心 玄 重 長 正
巴 叱 前 哉 勝 閑 磐
九 八 七 五 三 六 五
英 宗 了 澄 玄 正
怙 及 通 慶 琢 頼
七 六 六 五 四 五
既 之 兼 早 右 春
在 繼 閑 繼 運 阿
五 六 五 四 一

〔付記〕本稿は平成三〇年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金課題番号：18K00286）の研究成果の一部をまとめたものである。貴重な資料の閲覧と翻刻許可を出して下さった国立公文書館に御礼を申し上げる。